



原発事故から10年

福島からの声

これからも福島で

(一社)二本松有機農業研究会代表 大内 督

この世の終わり

2011年3月11日の東日本大震災、原発事故から10年を迎えようとしている。

震災の日は金曜日。提携先への野菜出荷の日で忙しくしていた。14時46分、ちょうど車を走らせて自宅に戻ろうとしていた時に激しい揺れが起こった。最初車のタイヤがパンクしたのかなと思うくらいハンドルを取られて大変だったが、電線が激しく揺れ、信号機が光っていないのを見て大きな地震だと気づいた。心配して急いで自宅に戻ったが、食器棚の皿が崩れているのと、土壁が少しはがれた程度で、思っていたより被害は少なかったので一安心した。

その後、外出していた母を迎えに車で出かけたのだが、その折、急に空が暗くなり、大粒の雪が降ってきた時にはこの世の終わりのような不気味な光景に見え、今でもあの時の恐ろしさははっきり覚えてる。

情報の乏しいなか、2日目に停電が解消し、テレビに映った津波の被害を見た時は絶句してしまった。さらに驚いたのは、原発が爆発し放射能汚染が広がっているというニュースだった。福島のほうれん草から放射能が検出され出荷停止になったと報道があり、我われの圃場の野菜も汚染されているのではないかと心配が出てきた。浪江町からの避難者が二本松へ来ていたため、炊き出しを行っていたが、野菜が汚染されている可能性があるとお達しがあり中止をした。

その後、知り合いのついでで自分たちの小松菜とほうれん草の放射能検査してもらったところ、やはり汚染されており、その結果にがっかりした。父と二人で畑にあるほうれん草、小松菜、キャベツなどの野菜をすべて抜き取り、使わない畑の隅に捨てた時には野菜に対して申し訳ない気持ちと、今後二本松で有機農業はできないのではないかと不安でいっぱいだった。

かすかな希望の光

そんな私の不安をよそに、父は「作ってみなければ分からない」と野菜作りを行っていた。作って測ってみると検出限界以下を示すNDが並び、福島で有機農業ができるのではないかとかすかな光が見えた気がした。

震災後、提携先のお客様は半分以下の4割くらいにまで減ってしまったが、逆に4割のお客様が残ってくれたと思うようにし、とにかく、野菜を作り、検査をし、データを見せることを徹底してきた結果、少しずつお客様も増えてきている。中には小さな

大内 督 (おうち おさむ) プロフィール

1973年生まれ、1997年から父信一のもとで有機農業を始める。

経営面積：田2ha、畑2ha、大豆・小麦等1.5ha。

2016年、二本松有機農業研究会の法人化と同時に、父から代表を引き継いだ。



ソーラーシェアリング
パネルの下ですくすくと育つ大豆。空がこんなによく見えます



「猫の手」援農（縁農
による収穫作業

子を持つ若いお母さんたちもいらつしやり、こちらが心配してしまっただが、我われを信頼してくれているので、ますますしつかりしたものを作らなくてはと、すごく励みになっている。

また、「バルシステム」や「大地を守る会」とは震災後も取引を継続していただいております、提携先が激減して大変な時に、野菜を購入いただいで助かった。加えて、現在は地元生協やスーパー等も地産地消にシフトしてきており、取引が増えてきていてうれしい限りだ。

日本有機農業研究会で立ち上がった福島東北有機農業支援活動では、皆さんの善意の寄付により多くの作業機械を福島に導入してもらい、作業の効率化によりとても助かっている。また、年2回の「猫の手作戦」では毎回20名前後の方がたに援農に来ていただいている。1人でやる作業も20人でやれば、外部被ばくを減らせると「被爆の共有」を掲げている。最初は、なんて過激なことを言うのかと思っていたが、春は田植え、冬は人参、ごぼう、長芋掘りと、一緒に作業してもらっている。今では皆さんベテランになり、予定していた作業では不足で、こちらが急かされてしまうこともあるくらいだ。福島の問題を福島だけに押し付けるのではなく、みんなで一緒に共有しようと、勉強会を開いて夜遅くまで話し合いをしてきたことも、とても有意義な時間だった。

再生への第二ステージ

原発事故後、今までエネルギー問題に関して無知だったことを反省した。コンセントに差し込めば機器は動き、スイッチを入れば明かりがつくことが当たり前のようになり、そのエネルギーがどこからくるのかなど、深く考えもしなかった。原発も危険だと認識はしていたが、国や東電の安全神話をうのみにし、なにも行動を起こしてこなかった。

2012年冬頃から当会にエネルギー部会を作って勉強会を開き、先進地への視察を繰り返した。当初太陽光発電には否定的だった。山が削られてパネルが張りつけられ、環境や景観を壊しているのを目の当たりにしていたためだ。また、パネルの20年後の処分への疑問もあり、太陽光発電は再生可能エネルギーではないと感じていて、あえて勉強はしていなかった。が、畑で野菜を栽培し、上のパネルで発電するソーラーシェアリングを視察したことで事業化に話が進んだ。

農地転用許可申請、融資の申請等資金集め、といういろいろな問題があったが、2018年8月に無事完成した。現在、パネルの下では夏に大豆、冬には小麦を栽培しているが、パネルの日陰の影響も少なく、順調に生育している。売電も順調にすすんでおり、当会の運営の助けになっている。将来的には、発電された電気ですらや農機具を充電するなど、化石燃料の使用を抑えた農業ができるようになればと考えている。

原発事故後、顔と顔の見える関係を大事にして信頼関係を築いてきたつもりは提携先のお客様が次つぎと去っていく、人間不信になりかけていましたが、そんな時に「猫の手」の皆さんをはじめ多くの方がたに支えられてここまで歩んでくることができました。これからは福島で有機農業を続け、自立していくこと、そして二度と原発事故が起きないように、今自分にできることをしっかりと行なっていくことが、皆さんへの恩返しと思いい、これからは歩んでいきたいと思ひます。